

旧会員の追悼山行「尾瀬」報告書

メンバー CL 土屋 康広 SL 西岡 康広 富樫 正三 他OB等5名

行程 6月7日 千葉～檜枝岐（民宿泊）

6月8日 檜枝岐～沼山峠～尾瀬沼～大江湿原～沼山峠～檜枝岐～千葉

70年代ちば山の会の中心的な存在であった彼が、ちば山創立50周年記念登山、OB山行（木曾駒ヶ岳）出発の前日に病により他界した。彼は、かねてよりこの山行にぜひ参加したいと望んでいたが叶えられないと知り、昔のように酒を差し入れてくれた。

「彼」とは、40年ほど前の一時代を画した「佃 正知」君である。

あれから4年、平成から令和に時代は移り、この6月、彼の奥さんを含めた古い山の仲間と共に、彼を偲んで、岩屋（ロッククライマー）を自認していた彼が、どういう訳か、こよなく愛した水芭蕉が咲き誇る尾瀬に行くことにした。

どの時代にも語り草となる人物がいる。その当時、保育園の保母さんをしていた会員が彼のことを称して「怖いけど、うちの5歳の男の子と同じ」と笑いながら語っていた。

昨年、全米オープンを制したテニスの大坂なおみさんが、優勝インタビューで照れながらユーモアを交えて「私の精神年齢は、まだ3歳・・・」。これとはかなり意味合いが違っている。どう違うかって・・・？ それは彼を知る人には明らかである。

梅雨空の尾瀬も、水芭蕉もいいが、その目的は、愛すべき彼の人柄や、数々の武勇伝を肴にしての酒と語り・・・。



テト泊専門の彼が唯一好んで利用した檜枝岐の民宿の前で

写真は左上から

西岡・塩足・佃・西岡

中畑・土屋・小野・富樫

6月7日朝7:00 千葉駅北口に集合、何年ぶりの再会、その姿に年月の移り変わりが伝わってくる。古い仲間の一人「小野ちゃん」はわざわざ山梨県から参加してくれた。今

回事情で参加できなかった旧会員も早朝の千葉駅まで差し入れを持って、わざわざ見送りに来てくれた。また、事前に酒の差しれをしてくれた昔の仲間もいた。皆、彼の「5歳の人柄」が好きだった人達である。

檜枝岐に着いたころには本格的な雨。尾瀬沼には明日行くことにして、民宿の部屋で、彼が中心の当時のスライドを上映。ビールを飲みながら見る映像はどの顔も若い。「俺の隣にいるきれいな人誰だっけ?」「あの・・・、あの人、あれ、あれ・・・。」

連日の穂高岳屏風岩登攀の休憩日に、彼が横尾から上高地へビール12本買い出しに（当時缶ビールはなくビンビール・もちろん横尾より上高地の方が安い）、往復6時間。

黒部川源流の「上の廊下」遡行の途中のテントの中、酒を酌み交わし議論が白熱して飲み過ぎ、翌日陽が登ってもテントから出てこない。やっと歩きだしても二日酔いで頭痛そう、気持ちも悪そう。淵を泳いで渡るときに溺れそうになっても、最高の川遊びだと豪語する彼。

厳冬期の剣岳小窓尾根で、足の親指に凍傷を負い、帰って来て奥さんにあきれかえられ、怒られた話等々、語り出したらきりが無い。

18:00 夕食の席に着くと、ぶっきらぼうな民宿のご主人が、彼のために、彼の写真を飾る席を設けてくれ、地酒を差し入れてくれた。今回の8人の参加者、ご主人、そして写真の彼、皆で彼の往年の活躍に再び献杯。このご主人もまた彼の人柄のよき理解者であった。

当時、まだまだ特別な人しか立ち入らなかったタクラマカン砂漠を数カ月かけてラクダで旅し、山以外の何かを探し始めた人。世界的なオペラ歌手として活躍している娘さんをただただ影で応援しているやさしいお父さん。未だに「山が命」と成長が止まっている人。あれから半世紀近い時が流れ、それぞれの道へ進んでも、あの時の風景と顔が蘇がえる。

6月8日、ときどき雨が降ったり陽がさしたりする中、今年は雪が多く、例年より遅く今が盛りとばかりに咲く水芭蕉を愛で、彼が愛した尾瀬を後にした。

